

美術の窓(20)

日本近世絵画の創作

大和文華館館長 吉川逸治



盤谷図 狩野山雪筆

八月も終りに近づいて、富岡鉄斎翁の展覧が終わると、館の名品展となり、10月10日からは秋の特別展が始まります。今年は狩野山雪の屏風絵、襖絵に軸物の小品、中品を併せて、約40点ほど集めて、展示したいと、学芸部の諸君が準備もいよいよ大詰にきて、大童になって、努力中です。

狩野派というと、室町時代の水墨漢画に源を発し、彩色ある大和絵風の親近性を取入れ、桃山、江戸と前後300年に涉って、繁栄する画派で、確実に近世日本の権力者層から庶民層にまで及ぶ絵画趣向の要求に広く応じてきた点は、通俗に墮す軽視すべき事柄ではなく、しかも明治画壇の復興もその末裔が荷うのですから。

狩野派の成功は、なんといいても、一族の結団力とともに、よく権勢の要請に応じ、また自らも時世の趣好を開発した点でありましょう。室町時代の禅宗絵画は、頂相(ちんぞう)にしても、山水画にしても、心に映ずる真理相を要点としています。

日本の作品ではありませんが、中国から請来され、大徳寺に伝わる、南宋末期の禅僧牧谿の水墨画三幅対にその完成された姿を見ることが出来ます。中央幅の白衣観音像は、崖下の石に坐して水流に臨み左右幅の猿鶴の真自然の相のうちに描出される。

人間諸物の立体を示し、空間の遠近、雰囲気を描出するには、墨の濃淡の的確にして、精妙極まる調子が何よりも必要条件であった。浙派に学んだ雪舟は、しばしば、

筆線の強調に駆られながらも、紙の白地に墨色濃淡の調子に基づく立体感、遠近構成の確然たる表出を守って、作画す。一方では、京都国立博物館の天の橋立図、赤衣達磨図、ボストンの寿老図という墨色濃淡の精妙な描法の図があり、他方では墨線を強調して表現を主張する慧可断臂図、破墨山水図がある。いずれも的確な水墨濃淡で厳しい実相把握を提示す。

雪舟に私淑せる後代の雪村の絵画もまた、然り。戯画はともかく本格的な制作は、水墨画にても、彩色画にても、遠近の構成は的確、墨の濃淡は調子の妙を尽す。晩年の著色自画像は背後に雪山月照の景を配し、宇宙と対峙す。遡って、かの文清筆の墨一色の濃淡で、維摩の姿に仮托せる荒川詮氏の像もまた然り。精しく墨色の濃淡の調子を整えて描出せる維摩、即ち詮氏の相貌の周囲、背後に真相の雰囲気を生ぜしむ。

室町絵画の多勢の水墨の達人のなかから、狩野派の始祖正信、元信父子は、日蓮宗なれば、禅画にこだわらず、下層武士出身らしい視覚をもち、常識によって、現実主義の描法を育て、また雪舟がすでに山水の大幅に彩色を加えて花鳥の美を謳いし如く、水墨の筆法を基礎に大和絵の彩色、趣好を導入して、山水、花木のみならず、ひろく田野都鄙の風景、生活を描く道をひらく。

時は戦乱も終幕に近づき、覇者信長、秀吉と相続いて、豪壮な城閣邸宅をかまえ、殿閣の障壁画が盛んに要求され、狩野派を筆頭に他

流の画家も暇なき程、時勢の豪華趣味、権力誇示は、力強い筆線に華麗な彩色。金泥金銀箔の使用は、障屏大画面の平面を輝かし、絵画の遠近を制約し、奥行を閉ざす画法を確立す。光と明暗を独特な方法で対立強化するため、描出された岩石樹木諸物は立体性を故意に強調される。室町絵画の写実主義とそれに基づく精神性は自ら、時代の現世主義と新しい性格の画面強調によって、一種のパロックの性格を発揮し、写実から画家の筆意、賦彩が解放され、象徴性、装飾性と創意が現れる。

元信の孫、永徳はまさに覇者信長の意気と合流して、新画風の創出の心身を尽す。安土城を飾って、上層に儒積の聖人たち、下の各階は日本の自然をまぶしい金襖に描く。樹木花鳥は象徴として、英雄の心を托す。豪放な画像とならんで、彼はまた精緻な洛中洛外図屏風を描いて、狩野派の風俗画への道を広げる。彼等はやがて、南蛮屏風まで領域にいれる。飽くなき食欲は時世の上下人心の征服欲、開発欲を反映する。秀吉に重用され、京狩野の祖となる山楽は、大覚寺の黄金地の襖に盛んな牡丹を描き、花ひらき、豊かな富貴の象徴を繰りひろげる。等伯父子も負けじと智積院に楓、松、桜と描いて人の青春、覇気、円熟の象徴を殿中に満たす。

しかれども、盛者必衰、驕る者久しからず、世は治まり家康、秀忠、家光の平和となって、武を退け文を奨める。画風も嵐は過ぎ、豪傑の夢も消ゆ。武家公家農民町

人職人と階級がきめられ、学問遊芸を余暇に習い学ぶ。絵画にその風潮が現われる。狩野派は探幽らが幕府の御用画家に任ぜられ、所謂近世アカデミズムが開かれる。画家は職人にあらず、筆法賦彩経営模写と秩序立てて画を習い、和漢の名画の迹を学ぶ。大家のもとに集まる古画名品を先生自ら縮図に写し集め、作画に鑑識に画道の手本とする。絵画も学問化される。知的教養として画家もまた和歌を学び漢書を繙き、学者文人と交り、教養を高めねばならぬ。

山楽を継いで京狩野の宗家となった山雪はかかる新しき教養の画家の代表的大家であったとされ、西洋近世絵画史の例をかりれば、ルネサンスに続くマニエリスムの画家に相当するか。したがって、画は創作となり、画は技巧を凝らし、しかも単なる画工の技にあらず、巧を越えて画中に織り込まれた複雑な象徴、学殖を汲みとれと云う創作になる。子、狩野永納は、「本朝画史」の著者であるが、その根元たるや父山雪の遺稿とあれば、山雪は画技の外に、古画の検索、画人伝の編集に努めた美術史家でもあった。

今回の山雪展は、宗達と時代をともにするこの学殖豊かな大家が、狩野派の伝統に押しつぶされず、いかに創作を凝らし、武家と交り、庶民とも交る現世的な江戸狩野とはちがう京狩野の本家が、新時代の複雑な文化組成を示すかを解くという課題をもって準備されてきました。

季刊 美のたより No.76

昭和61年 8月28日

発行 大和文華館